

# 人の子の親となりて

2023

4  
・  
1  
2

水

〜

8  
・  
2  
0

日



会期、開館日数、入館者数、関連イベント

2023.4月12日(水)～8月20日(日)

96日間 1,339名

関連イベント「安吾風の館」見学と安吾ゆかりの地めぐり

4/8 4名、5/13 3名、6/10 4名、

7/8 2名、8/12 (猛暑のため中止)

旧市長公舎

## 安吾風の館

■観覧 無料

■開館時間 10:00～16:00

主催 公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団  
新潟市

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町 5927 番地 9

TEL & FAX 025-222-3062

# 人の子の親となりて

2023. 4月 12日 **水** — 8月 20日 **日**

1953年8月、46歳ではじめて子どもをもった安吾は、戸惑いながらも次第に子に対して愛情が深まり、父となった事への感謝を感じるようになる。

名前の由来を記した「命名の書」をしたため、子のために自らの着物の胸の部分を切り取ってお守りを作り、そして寝冷え防止の腹掛けのデザイン画も描いた。父として一生懸命とり組んでいる姿がみえる。

桐生自宅での様子を写した濱谷浩撮影の写真には、子に向ける少し緊張した、しかし穏やかな安吾の表情が映し出されている。

このたびの展覧会では、子のために安吾が用意したもの、写真や作品を通して一人の親となった姿を紹介し、父としてはわずか1年半で急逝した安吾に思いを馳せて頂きたいと思う。

## ◇おもな展示作品

- 自筆原稿 「砂をかむ」 神奈川近代文学館 複製作成
- 書 命名の書
- 遺愛品 お守り、腹掛けのデザイン 他
- 初出誌「人の子の親となりて」 『キング』 1954年
- 初出誌「砂をかむ」 『風報』 1955年
- 初出誌「育児」 『婦人公論』 1955年 新潟市立中央図書館 所蔵
- 濱谷浩撮影 乳母車を押す安吾 他 1954年
- 資料 「書かれなかった安吾風土記」 竹内一郎 『中央公論』 1955年  
「安吾・川中島決戦録」 檀一雄 『文藝春秋』 1955年  
『クラクラ日記』 坂口三千代 文藝春秋社 1967年 ほか

【和室展示】 坂口綱男撮影 「人の子の親となりて」  
息子の場合

次回展覧会のご案内  
安吾と囲碁

## 関連イベント

「安吾 風の館」見学と安吾ゆかりの地めぐり

日時： 4/8、5/13、6/10、7/8、8/12 各土曜 13:30～15:30  
集合場所： 安吾 風の館 参加費：500円 定員 10名  
申込・問合せ：安吾の会事務局（新潟・市民映画館シネ・ウインド）  
主催：安吾の会 TEL 025-243-5530



バスのご案内 新潟駅万代口バスターミナル 7番線から、または  
観光循環バス乗車「西大畑坂上」バス停下車徒歩3分

- 開館時間 10:00～16:00 ■観覧無料
- 休館日 毎週月・火曜日 祝日または振替休日の場合はその翌開館日

旧市長公舎 **安吾 風の館**

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町 5927 番地 9 TEL & FAX 025-222-3062

## 人の子の親となりて

「人の子の親となりて」とは、『キング』（1954年）に掲載された安吾のエッセイである。「人の子」とは大仰ない方だが、安吾にすれば「犬の仔」ではなくて「人の子」ということなのだ。「私には子供が生れないと思っていたので、家族のつもりで犬を飼っていた。」と始まるこのエッセイでは、「人の子」と「犬の仔」をひとつひとつ比べている。人にすぐじゃれる仔犬と違って、「生まれたての子供は目も見えない」し、反応もない。四五十日後に泣き声を比べてみると、「赤ん坊の泣き声など」「こんなものか、と思うような安心もあった」という。二ヶ月ぐらいいして笑顔を見せるようになると、「犬と同じぐらいに可愛くなった」、そして「百日目ぐらいから、進んで子供を抱く気持ちにもなった」と自身の変化を記している。

父親というものは、安吾に限らず子供が生まれるということは「縁もなく愛嬌もない生物が突然現れてわが子を称するようなもの」だから、不安や困惑するのも正直なところなのかもしれない。そして子どもが成長し、次第に反応を示し、少しでも意思疎通ができるようになると「なんとなくただ漫然と自信がついてきた」と感じるのだろう。いわば子どもの成長に応じて「親」を意識し、「親」となっていくのだ。安吾は自らの変わりようを、まるで観戦記を書くような眼で見つめている。

1953年8月、安吾は檀一雄（1912-1976）とともに、それぞれ上杉謙信と武田信玄の立場で川中島の戦いを描くという雑誌社の企画で、新潟県から長野県松本にかけて旅をしていた。そんな中、安吾は檀のいない間に荒れだし、ついに留置場に入れられてしまう。留置場が出されて、ホテルにいるところへ電話で綱男誕生の知らせが入った。檀一雄はその時の安吾の様子を「ホッと一息ついたような…辺りを見廻してみるような…淋しい、しかし毅然とした微笑を忘れることが出来ぬ」（『安吾・川中島決戦録』『文藝春秋』1955年）と回想している。

自身の経験から名前でからかわれることのないようにと、よくよく考えて名前を決め、健やかな成長を祈ってお守り袋を縫う。自分の着物の胸の部分を取り取って、ひと針一針丁寧に縫ったお守り袋は、妻三千代の分も含めて三つ作った。写真を見ると綱男には服に結びつけたり、首から提げたりさせていたようだ。また夏に生まれた子であるから、よちよち歩く頃には「腹掛け」がいるだろうと、そのデザイン画を描く。「パパもママもこんなにおまえを愛してる」「おまえは日本一幸せものだ」（坂口三千代『クラクラ日記』文藝春秋1967年）と言ったというが、考えつくだけの心を込めて、わが子に相對していたのだ。

安吾は子どもについて、先の「人の子の親となりて」のほか、「砂をかむ」（『風報』1955年）、「育児」（『婦人公論』1955年）と三篇のエッセイを書き、後者二作品は絶筆とされている。付された写真には、父としての表情が残されている。

1955年2月17日朝、急逝した安吾の最期の様子は、妻三千代の『クラクラ日記』に詳しいが、「人の子の親」となった戸惑いが喜びとなり、感謝の気持ちを感じていたというだけに、胸が熱くなる。友人石川淳（1899-1987）氏は、通夜の帰り際「綱男を抱かれてさめざめとお泣きになりました。それはもうとめどなく涙を流されました」（同）と三千代は記している。

1歳半で父を亡くした綱男氏に、父の記憶は何もないというが、安吾が遺したものの、命名の書、お守り、腹掛けのデザイン画など、何よりも三篇の作品に父の思いが込められているように思う。

そして父・坂口炳五という存在は、作家・坂口安吾の作品として、今も生き続けているに違いない。

# 人の子の親となりて

2023年 4月12日(水)～ 8月20日(日)

No.	種類	作者名	作品名	年	出版社	備考	所蔵者
1	原稿	坂口 安吾	砂をかむ 3枚 (複製)	1955年		神奈川県近代文学館製	
2	書	坂口 安吾	命名の書	1953年		軸装	個人蔵
3	遺愛品	坂口 安吾	お守り袋	1953年		安吾手縫い	個人蔵
4		坂口 安吾	腹掛けのデザイン	1953年		デザイン画	個人蔵
5		坂口 安吾	腹掛けのデザイン	1953年		「綱男」	個人蔵
6		坂口 安吾	腹掛けのデザイン	1953年		「男・蛇」	個人蔵
7		坂口 安吾	腹掛けのデザイン	1953年		「蝶」	個人蔵
8		坂口 安吾	腹掛けのデザイン	1953年		「顔」	個人蔵
9	はがき	坂口 安吾	綱男宛 年賀状	1955年		毛筆	
10		坂口 安吾	三千代宛 年賀状	1955年		毛筆	
11	絵画	坂口 安吾	ラモーのスケッチ	不詳		鉛筆画	
12	初版本	坂口 安吾	夜長姫と耳男	1953年	大日本雄弁会講談社	安吾署名あり 「綱男の母え」	
13	初出誌	坂口 安吾	人の子の親となりて	1954年	大日本雄弁会講談社	『キング』 第30巻 第5号	
14		坂口 安吾	砂をかむ	1955年	『風報』	第2巻 第3号	
15		坂口 安吾	育児	1955年	中央公論社	『婦人公論』第456号	市図書館蔵
16	資料		書上邸銅版画 (複製)	/		1889年制作画冊の内	
17			書上邸前 写真	/			
18		近藤 絹子	書上邸 間取り図	/		コピー	
19		竹内 一郎	書かれなかった安吾風土記 (高知県の巻)	1955年	中央公論社	『中央公論』第70年 第4号	
20		檀 一雄	安吾・川中島決戦録	1955年	文藝春秋社	『文藝春秋』33巻第7号	
21		坂口三千代	クラクラ日記	1967年	文藝春秋社		
22		坂口三千代	クラクラ日記	1989年	筑摩書房	文庫	
23		坂口三千代	安吾追想	1981年	冬樹社		
24			山陽、四国、瀬戸内海	1949年	日本交通公社	旅行ガイドブック	
25		写真	濱谷 浩	乳母車を押す安吾	1954年		桐生・自宅前
26	濱谷 浩		庭にて	1954年		桐生・自宅	
27	濱谷 浩		安吾と綱男	1954年		桐生・自宅庭	
28			南川潤氏と	1952年		応接間にて	個人蔵
29			安吾・三千代・綱男	1954年		兎のぬいぐるみ	個人蔵
30			離乳食	1954年			個人蔵
31			ラモーが飛びつく	1954年			個人蔵
32			庭にて 膝に抱く	1954年			個人蔵

所蔵者欄：市図書館＝新潟市立中央図書館 空欄は、新潟市・坂口安吾遺品資料 作品の保全を考え、複製を展示することもありま

## 【和室 写真展示】

坂口綱男 撮影 「人の子の親となりて」息子の場合

## 【関連事業】

「安吾 風の館」見学と安吾ゆかりの地めぐり

4/8(土)、5/13(土)、6/10(土)、7/8(土)、8/12(土) 13:30～15:30 定員10名

申込：新潟・市民映画館シネ・ウインド(tel 025-243-5530)へ電話にて申込。参加費500円



坂口安吾 書  
命名の書

個人蔵

8月6日に誕生した綱男の、名前の謂われを記した書。

46歳で父となった安吾は、その思いを「人の子の親となりて」や「砂をかむ」に書いているが、いずれも照れのうしろに、父としての嬉しさがあふれている。自分が子供の頃、本名炳五を「ヘゴサ」と呼ばれからかわれたことから、そんなことのないよう、いろいろと考えた結果、「綱男」と命名したようだ。

チャック=ファスナー

1927年に尾道で「巾着(きんちやく)」のようにしっかりしまることから、それをもじって、「チャック」として販売したところ、評判となった事による。

アトム=原子

坂口三千代著

クラクラ日記 1967年 文藝春秋社

〈名前について〉

坂口は子供に綱男と命名した。彼は信州にいたとき電報を受けるとすぐ名前を考えたらしく、熊襲くまそという名前はどうか、と祐チャンが私がまだ病院にいたときに報告してくれた。檀さんが考えてくれたのは、千曲川近辺にいたからだろうか、千久馬という名前だった。

「熊襲」では、病院の山森先生が大笑いして、それはちょっと可哀そうだ、といった。私も近所の子供などクマちゃんといって遊びにこられるのはいやだ、クマさんハツつぁんみたいで嫌ね、とって反対した。

坂口は熊襲という名前を冗談でなく考えたらしく「日本の一番古い先祖の名前なんだよ」といっていた。

檀さんの考えてくれた千久馬は、千は三千代の千、馬は、坂口の本名・炳五のひのえ馬、千と馬を久しいというのでつなげたものだとおっしゃった。音もよく、意味もステキだと思うが、私としては、もっと強そうな名前をつけてもらいたいのだった。

丈夫で、強く強く育ててもらいたい。すこしばかりのことでへこたれてしまわないように。

綱男のオの字を坂口は夫としたのだが、私は男という字の方が強そうだといって男という字にしてもらった。お前とオレはじきに離れそうになる、綱という字はいいだろうと彼はいった。

### 祐ちゃん

南川潤氏が紹介してくれた、桐生の織物に刺繍することを生業としている男性。

六尺近い筋骨逞しい青年だが、声も気立ても優しく、桐生における坂口家の日常を何かにつけ、支え助けてくれた。



坂口安吾手製

お守り袋

個人蔵

安吾は自分のドテラ（厚く綿を入れた長着）の胸の部分を切り取って、お守り袋作った。ひと針一針手縫いで作ったお守り袋である。身を以て、わが子を守るという思いで作ったのだろう。

お守り袋は綱男用のほか、妻三千代と自分の分と、3つ作ったという。展示しているのは、安吾自身のもので、未使用である。

写真をみると、長い紐をつけて綱男の首から提げたり、服に結びつけられていて、常に身につけさせていた様子がうかがえる。

綱男用の袋は、長く使われていたため四隅がすり切れていて、中には幾社もの守り札が入られていた。

坂口安吾

## 腹掛けのデザイン画

個人蔵

乳幼児がお腹を冷やさないように、金太郎が着けていたような菱形の腹掛けを着せるが、安吾は夏生まれの子が、歩き始める頃にあわせて、自らそのデザインを考えた。腹掛けは、正方形の布を斜めに使い、紐を付けて首と腰の部分で結ぶようにするが、ハガキに描かれたデザインは、かなり凝っている。

1953年巳み年生まれの子なので、蛇に男、そして名前「綱男」をそのまま描いたものなど、いろいろある。

実際には作られなかったようであるが、子の健やかな成長を願って考えられ、父としての思いがあふれている。

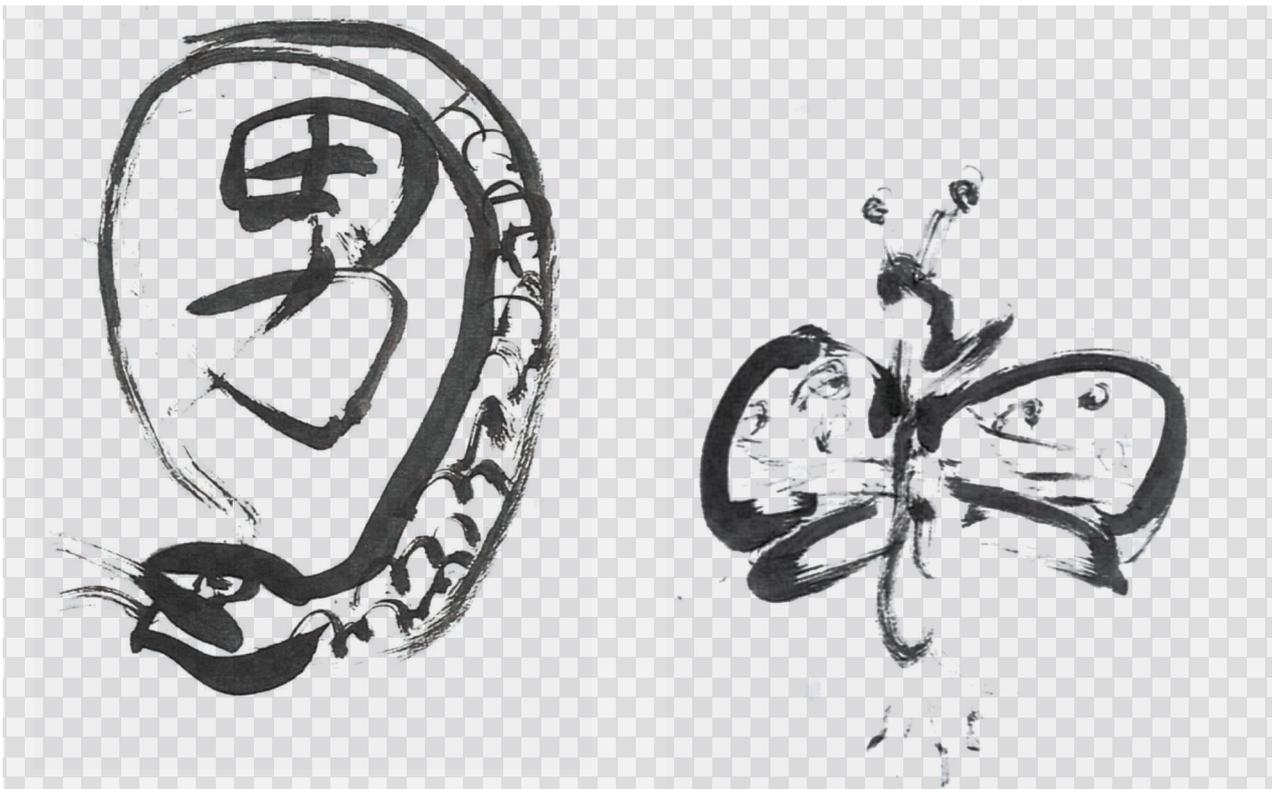
坂口安吾

## 腹掛けのデザイン画

個人蔵

乳幼児がお腹を冷やさないように、寝冷え知らずとして重宝されたのが腹掛け。胸からおなかに当たる部分に、安吾は自ら墨で絵を描き、こんな腹掛けを考えていたのだろうか。

画面いっぱい描かれた顔は、綱男の顔であろうか、魔除けのための顔であろうか。蝶は、仏教では身体からでた魂を極楽浄土に運んでくれる神聖な生き物であり、また形態をかえて成長することから、「不死、不滅」の象徴として武士に好まれたもの。安土桃山時代には能装束や小袖の意匠にも取り入れられた文様でもある。





1954 (昭和 29) 年 4 月号 (第 30 巻第 5 号)  
『キング』 大日本雄弁会講談社

「人の子の親となりて」掲載、初出誌。

50 歳近くになって初めて親となった戸惑いからか、成長のひとつひとつを仔犬と比較して綴っている。

子どもが笑うようになると、「犬と同じくらい可愛くなった」、さらに「犬より可愛くなった」、そして終に「百日目ぐらいから進んで子供を抱く気持ちにもなった」という。

飼っていたコリー犬も、始め子どもに敵対心を燃やしていたが、「犬もだんだん子供を愛するようになり」、これも安心だという。

「子供の生れたことを何かに感謝したいような気持ちが深くなるようである」という言葉に、万感込められている。

綱男 vs ラモー 1954 年

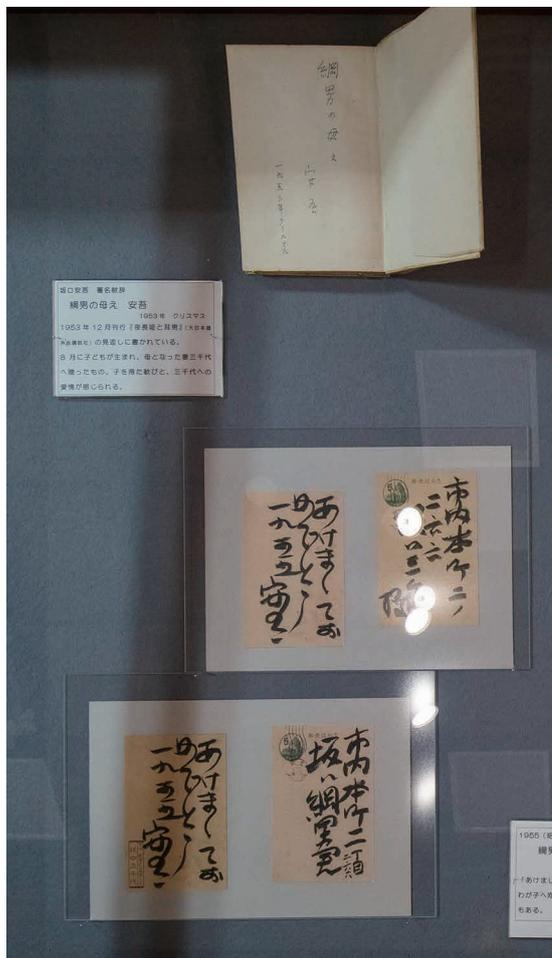
1952 年安吾夫妻はコリー犬ラモーと一緒に桐生へ引っ越してきた。

安吾も三千代も大の犬好き。川端康成氏が世話をしてくれたコリーの仔犬は、病死したラモーの異母弟であるとわかり、「ラモー二世」と名付けて、わが子のように可愛がった。



綱男の誕生は、安吾にとっても、ラモーにとっても思いがけない出来事であった。

安吾の愛情を独占していたラモーにとって、最大のライバル登場である。はじめは柵を作って、ラモーが近づかないようにしたが、しだいに犬も「だんだん子どもを愛するようになり、敵意がなくなった」ので、安心したという。



坂口安吾 署名献辞

## 綱男の母え 安吾

1953年 クリスマス

1953年12月刊行『夜長姫と耳男』(大日本雄弁会講談社)の見返しに書かれている。

8月に子どもが生まれ、母となった妻三千代へ贈ったもの。子を得た喜びと、三千代への愛情が感じられる。

1955(昭和30)年

## 綱男宛 年賀状

「あけましておめでとう」と墨書されている。わが子へ向けた年賀状。妻・三千代宛のものもある。

グラビア「男の家庭科」 『婦人公論』1955年4月号

婦人公論 新潟市立中央図書館所蔵

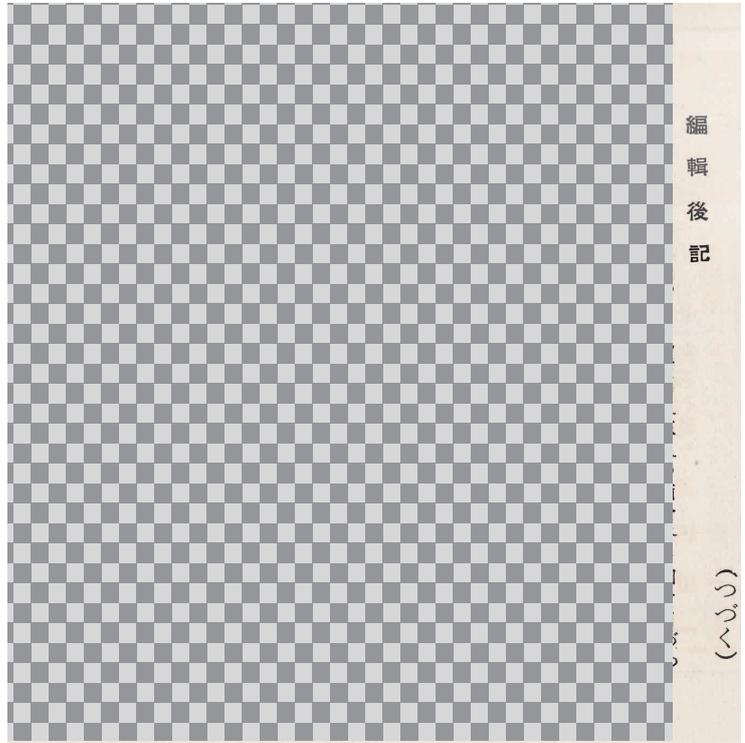
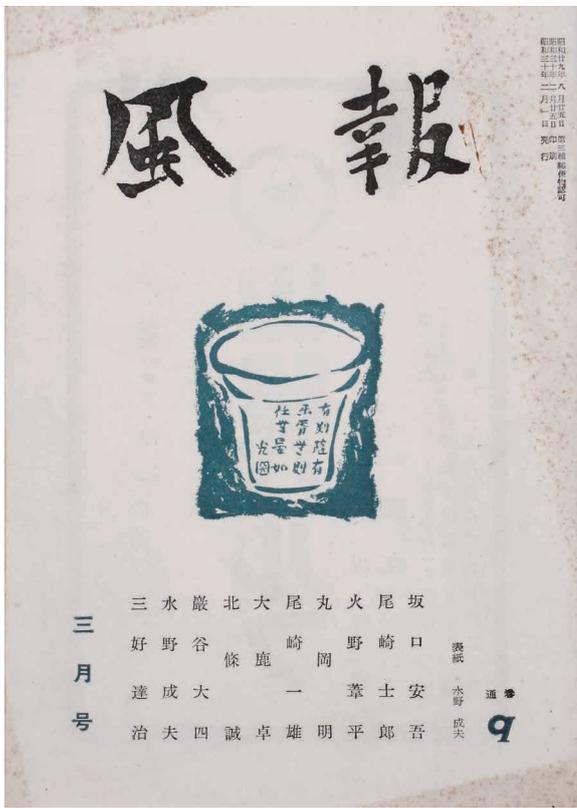
## 育 児

五十ちかい年で初子が生れると、てれたり、とまどったりするばかりで育児については無能である。いまもって子の抱き方も知らないが、たまに父が子を抱いたり世話したり母のしてやるようなことをすると、たいそう喜ぶものである。別にしつけらしいことはしないが、父のすることをまねながら自然に育つものらしい。私のしてやることといえば毎日何か食べさせて時々オナカを悪くさせることぐらいで、女房にたしなめられるばかりだが、オッパイのある母親とちがって、父の愛情の表現は何かうまそうな物を食べさせてやることくらいしかないと母は理解してくれない。

そして母親は本能的に子供の独占慾が旺盛であるが、結局その方が無能な父には手が省けるので、専ら母の独占慾にまかせている。

グラビア頁「男の家庭科」の中に、写真とともに「育児」が掲載された。本文末尾に「氏の急逝により計らずもこの文は絶筆となった」と付されている。





1955（昭和30）年 3月号（第2巻第3号）

## 文芸誌「風報」

安吾とも親しい尾崎一雄、尾崎士郎、水野好夫の三人が編集に携わっている。突然の訃報に、編集後記に追悼の言葉が添えられた。

「砂をかむ」は、絶筆として掲載された。



1954（昭和29）年

## 離乳食を食べさせる安吾

3が月を過ぎると、リンゴのジュースや野菜のスープなどをごく少量から、徐々に増やす。

安吾はお芋、パイナップルの缶詰、キャラメル等次々と買ってきては、三千代にたしなめられた。

（クラクラ日記）



南川 潤      みなみかわ・じゅん



大正2年(1913)東京日本橋に生まれる。本名、秋山賢止。  
実家が日本橋の南側にあったのと、永井荷風に『三田文学』で激賞された、当時新進の作家谷崎潤一郎にあやかり、南川潤というペンネームをつける。  
慶応義塾大学英文科を卒業し、柿沼ツネと結婚した昭和12年(1937)、『掌の性』で第2回三田文学賞を受賞、同14年『風俗十日』出第3回三田文学賞を受賞し、三田派の新人として注目され、高見順に認められた。  
昭和15年(1940)大井広介、檀一雄らと同人誌『現代文学』に参加。翌16年野口富士雄、船山馨らと「青年芸術派」を結成して新文学運動の旗手となる。戦時下の19年妻の実家のある桐生市へ疎開した。心臓の弱かった南川は桐生の自然を愛し、また桐生の人々に愛され、「上毛文芸界」「緑地帯文芸界」を指導するなど桐生文化に貢献した。桐生倶楽部青年部や桐生文化学院などを通じて次代を担う若者に大きな影響を与え、また晩年は日中友好や原水爆廃絶運動などの平和運動に携わった。没後ウィーン平和賞を贈られている。

川を見下ろす岸辺の小高い所に住まいがあり、庭でクラシックやシャンソンなどのレコードを聴いてたのしんだという。またピカソに傾倒してフランスから画集を取り寄せ、自らも絵を描いた。子供たちのために小函や木片、タイルを美しく彩り、ガラスを切って小さな額絵やブローチなども作った。

次女の是子(よしこ)さんによると、「怒られた記憶などない優しい父で、わからないことを聞くと何でも必ず答えてくれた」という。

軽快な筆致で、男女の恋愛を描く都会主義的作風で知られる南川潤は、『窓ひらく季節』(昭和23年臼井書房)の中で語るように、「どうだ、美しい街だろう」と自慢し「何かしら故郷のようにこの街を愛する心になっている」桐生に戦後も住み続け、桐生の人々と暮らした。昭和30年(1955)9月、心臓弁膜症からの脳出血にて42歳の若さで急逝している。

安吾が桐生へ引っ越したのは、そんな穏やかな人柄の南川潤が暮らす地であったことも大きな要因であった。毎週水曜に坂口家に集う水曜会には南川へ使いを出して招き、南川も必ず参加していた。心臓の悪い南川を気遣い、また遺跡見学などへは一緒にでかけた。しかし昭和28年(1953)6月末、東京でアドルムを服用した安吾が帰宅後に暴れ出し、妻三千代が南川宅へ逃げ込んだことから、二人は絶交状態となる。その後間に人が入って、表面的には和解したが、安吾が亡くなるまで南川が安吾宅を訪れることはなかった。

濱谷 浩 はまや・ひろし  
1915年（大正4）— 1999年（平成11） 84歳



1915年東京下谷に生まれる。

オリエンタル写真工業を経て、1937年（昭和12）フリーの写真家になり、翌年瀧口修造を中心に永田一修、阿部展也、田中雅夫らと前衛写真家協会をつくる。

1939年（昭和14）グラフ雑誌「グラフィック」の仕事で新潟県高田市（現・上越市）に行き、「高田聯隊スキー部隊冬期演習」を取材、カンジキをつけて雪を歩くことに衝撃をうけ、また高田の民俗研究家、市川信次（1901—1982 高田瞽女の研究で知られる）との出会ったことから、東京に戻って渋沢敬三に会い、また和辻哲郎の『風土』を読むなど民俗学に傾倒していった。長年にわたって日本海沿岸の漁村、農村の暮らしを調査し、撮影する。

戦時中高田（新潟県上越市）に疎開し、小田嶽夫や堀口大学らと交流する中で過酷な自然環境で生きる人々の強さと快活さを知る。

1948年茶道家・南部朝と結婚。1949年（昭和24）アルス『カメラ』に「會津八一博士」を発表。『アサヒカメラ』復刊1号に「小宮豊隆像を描く安井曾一郎氏」「小林古徑画伯」「孤独に生きる高村光太郎」を掲載。

1954年（昭和29）「裏日本」の撮影を開始し、「日本人の本質、日本の本質は地方にある」と、人間と風土（自然・生活）に眼を向けていった。

1960年（昭和35）アジア初のマグナム・フォトス寄稿写真家となる。日米安保条約反対のデモを大衆側から取材するが人間に幻滅して、以後世界各地を巡って自然をテーマに写真を撮るようになる。

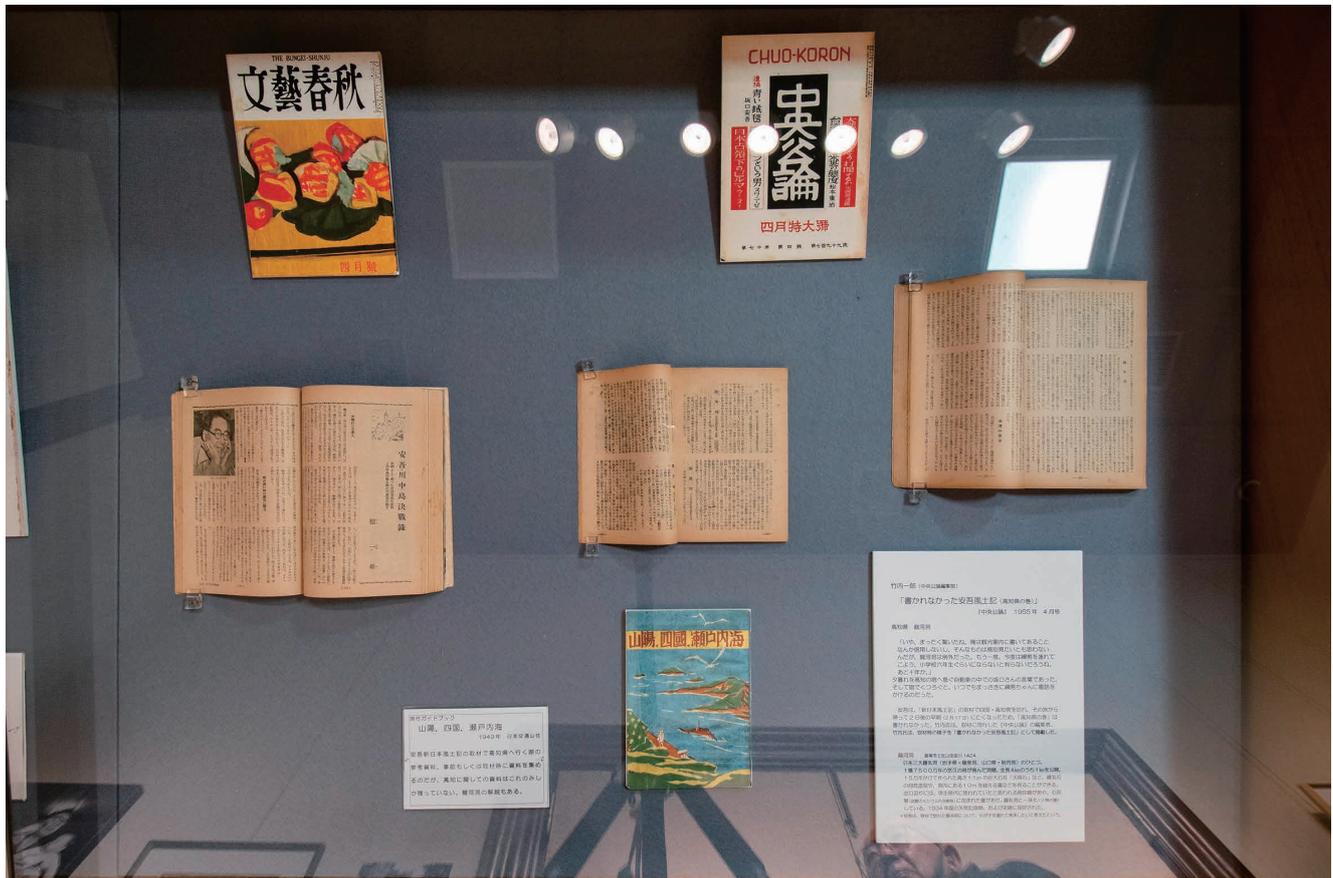
鋭い視点での記録性と質の高い抒情性の作風は海外で高く評価され、「20世紀の偉大な写真家たち」に選ばれた。

濱谷は安吾の晩年の写真を多く撮っている。桐生での家族との写真、1954年新潟市内や浜で撮られた写真など、いずれも濱谷ならではの視点が感じられる。

#### 主な作品集

- 1956年 雪国／毎日新聞社
- 1957年 裏日本／新潮社
- 1958年 見てきた中国／河出書房新社
- 1960年 怒りと悲しみの記録／河出書房新社
- 1964年 日本列島／平凡社
- 1971年 アメリカン・アメリカ／河出書房新社
- 1981年 濱谷浩写真集成 地の貌・生の貌／岩波書店
- 1982年 學藝諸家／岩波書店
- 1985年 昭和女人集／毎日新聞社

ほか多数



竹内一郎（中央公論編集部）

「書かれなかった安吾風土記（高知県の巻）」 『中央公論』1955年 4月号

高知県 龍河洞

「いや、まったく驚いたね。俺は観光案内に書いてあることなんか信用しないし、そんなものは格別見たいとも思わないんだが、龍河洞は例外だった。もう一度、今度は綱男を連れてこよう。小学校六年生ぐらいにならないと判らないだろうね。あと十年か。」

夕暮れを高知の宿へ急ぐ自動車の中での坂口さんの言葉であった。そして宿でくつろぐと、いつでもまっさきに綱男ちゃんに電話をかけるのだった。」

旅行ガイドブック

山陽・四国・瀬戸内海

1949年 日本交通公社



安吾新日本風土記の取材で高知県へ行く際の参考資料。事前もしくは取材時に資料を集めるのだが、高知に関する資料はこれのみしか残っていない。龍河洞の解説もある。

## 尾崎俵士さんの思い出

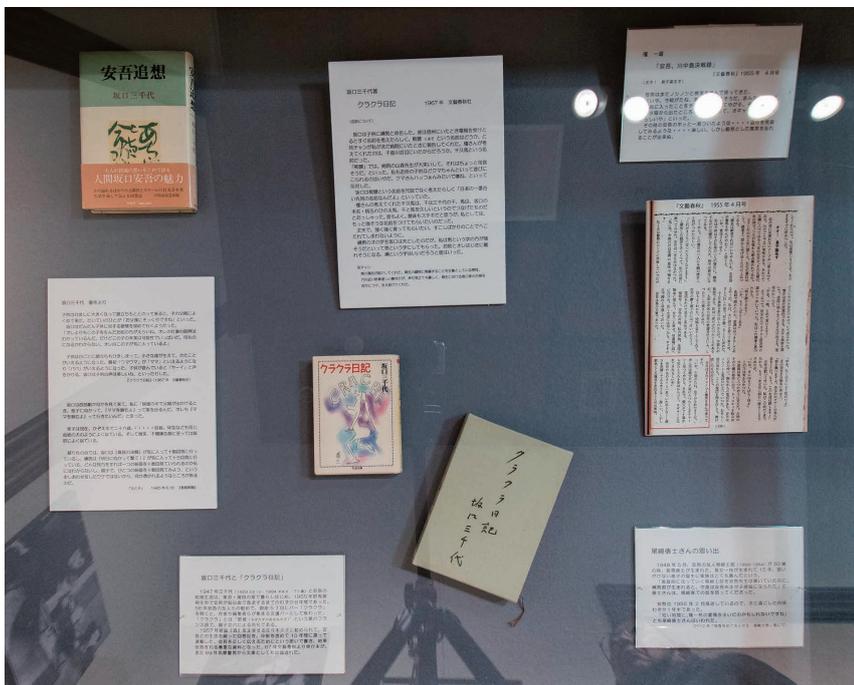
1948年5月、安吾の友人尾崎士郎（1898-1964）が50歳の時、長男俵士が生まれた。長女一枝が生まれて15年、思いがけない息子の誕生に家族はとても喜んだという。

「家庭的になっていく尾崎士郎を安吾先生は嘆いていたのに、綱男君が生まれると、今度は安吾先生が子煩悩になられた」と俵士さんは、尾崎家での話を語ってくださった。

安吾は1955年2月急逝しているのに、子と過ごしたのはわずか1年半であった。

「短い時間に、精一杯の愛情を注いだのかもしれないですね」とも尾崎俵士さんはいわれた。

(2012年「安吾をめぐる人々II 尾崎士郎」展にて)



## 坂口三千代と「クラクラ日記」

1947年三千代（1923大正12 - 1994平成6 71歳）と安吾の結婚生活は、東京・蒲田の家で暮らしはじめ、1955年群馬県桐生市で安吾が脳出血で急逝するまでのわずか8年間であった。56年安吾の友人らの勧めで、銀座5丁目にバー「クラクラ」を開くと、作家や編集者らが集まる文壇バーとして賑わった。

「クラクラ」とは“野雀（そばかすのある女の子）”という意のフランス語で、獅子文六による命名である。

1957年雑誌『酒』を主宰する佐々木久子に勧められて、安吾との生活を綴った回想記を、中断を含めて10年間に渡って連載した。安吾を正しく伝えるためにという思いで書き、結果安吾を知る貴重な資料となった。67年文藝春秋より単行本が、また89年筑摩書房から文庫としても出版された。

## 坂口三千代 著作より

子供は日ましに大きくなって顔立ちもとのつて来ると、その父親によく似て来た。たいていのひとが「お父様にそっくりですね」といった。

坂口はだんだん子供に対する愛情を深めて行くようだった。

「オレよりもこの子を生んだお前の方がえらいね。オレの仕事の限界はわかっているんだ。だけどこの子の未来は可能性でいっぱいだ。何ものになるかわからない。オレはこの子が気に入っているよ」

子供は日ごとに顔立ちもひきしまつて、小さな歯が生えて、かたことがいえるようになった。最初「ウマウマ」が「ママ」といえるようになり「パパ」がいえるようになった。子供が遊んでいると「ヤーイ」と声をかける。坂口は子供の声は美しいね、といたりした。

『クラクラ日記』(1967年 文藝春秋社)

坂口は西部劇か何かを見て来て、私に「映画の中で父親が出かけるとき、息子に向かって、『ママを頼むよ』って家を出るんだ、オレも『ママを頼むよ』って行きたいんだ」と言った。

息子は現在、かぞえ年で二十六歳、・・・・容貌、体型なども同じ血統の犬のようによく似ている。そして微笑、不機嫌な顔に至っては抜群によく似ている。

凝り性の点では、坂口は『真昼の決闘』が気に入って十数回見に行っているし、綱男は『明日に向かって撃て！』が気に入って十三回見に行っている。どんな見方をすれば一つの映画を十数回見られるのか私にはわからないし、親子で、ひとつの映画を十数回見よう、という申しあわせをしたワケではないから、何か憑かれるようなところがあるのだ。

「父と子」 1985年6.18 『産経新聞』

檀 一雄

「安吾、川中島決戦録」

『文藝春秋』1955年 4月号

〈オオ！ 息子誕生す〉

安吾はまたノシノシと微笑を含んで戻ってきた。

「いや、今朝がたね、息子が生れたそうだ。赤ん坊は親父がブタ箱に入ったことをチャーンと知ってやがる。それで、親父がブタ箱から出たところを見はからって、オギャーと生れてきたらしいや」といった。

その時の安吾のホッと一息ついたような・・・・辺りを見廻してみるような・・・・淋しい、しかし毅然とした微笑を忘れることが出来ぬ。



明治29年新潟商家明細

略歴

三人庭

概説・挨拶

濱谷浩 桐生写真  
安吾と龜男

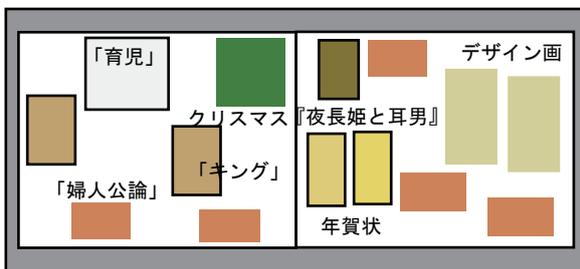
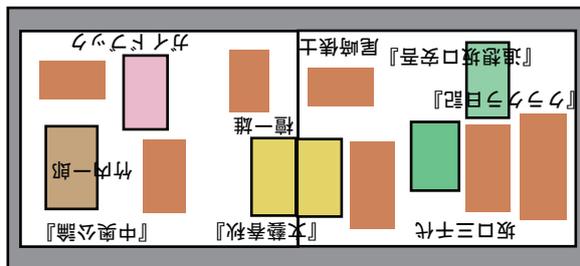
濱谷浩略歴  
乳母車

「人の子の親となりて」  
「砂をかむ」  
編集後記

ラモー写真 ラモーのスケッチ 飛びかかるラモー

南川潤氏と

南川潤略歴



離乳食

書上邸銅版画

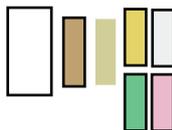
書上邸

間取り図

坂口安吾年譜

写真  
解説パネル  
掛け軸、額

自筆原稿（複製）  
初出誌  
腹掛けデザイン  
書籍



# 人の子の親となりて

2023. 4月12日 [水] — 8月20日 [日]

兎のぬいぐるみ  
命名の書  
腰に抱く

和室展示

「人の子の親となりて」 息子の場合 撮影：坂口綱男



## 参考文献

「坂口安吾展」図録 世田谷文学館 1996年  
第76回企画展「無頼の先へ ―坂口安吾 魂の軌跡―」図録  
群馬県立土屋文明記念館

『キング』 1954年 第30巻 第5号  
『婦人公論』 1955年 第40巻 第3号  
『風報』 1955年 第2巻 第3号  
『中央公論』 1955年 第70年 第4号  
『文藝春秋』 1955年 4月号

坂口三千代著 『クラクラ日記』 1967年 文藝春秋社  
坂口三千代著 ちくま文庫『クラクラ日記』 1989年 筑摩書房  
坂口三千代著 『安吾追想』 1981年 冬樹社  
坂口三千代著 『追憶 坂口安吾』 1995年 筑摩書房  
濱谷浩写真集『學藝諸家』 1983年 岩波書店  
濱谷浩写真集成展 1930-1981 1981年 PPS 通信社